慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

| | |
|---|---|
| Title | E・J・ホッブスボーム著 安川悦子・水田洋訳 市民革命と産業革命 : 二重革命の時代 |
| Sub Title | E. J. Hobsbawm, The age of revolution : Europe 1789-1848, 1962, (London) translated by E. Yasukawa and H. Mizuta |
| Author | 飯田, 鼎 |
| Publisher | 慶應義塾経済学会 |
| Publication year | 1968 |
| Jtitle | 三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.61, No.8 (1968. 8) ,p.921(87)- 924(90) |
| JaLC DOI | 10.14991/001.19680801-0087 |
| Abstract | |
| Notes | 書評 |
| Genre | Journal Article |
| URL | https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19680801-0087 |

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

求を何も持っていない。」(4)（傍点神代）

このようにして資本家の利潤取得は、彼によれば不正義の取得であり、自然法に対する人為的侵害、即ち全労働収益権に対する侵害なのである。従って又、資本家の労働者に対する支配権の内容も、このようなものとしてしか把えられておらず、この支配権そのものが歴史的に如何にして発生してきたのかは究明されていない。だから、この、資本家の労働者に対する支配は封建領主の農奴に対する支配と、従って又、利潤取得は封建的地代取得と本質的には異るものとして把握されていない。「彼（資本家―神代）はいかにしてこの権力を獲得したのかについては、私は今は次の如く述べるより以上には考察しないだろう。即ち、それはある時期に若干の人々によってこの国の全地表が占有されたということに由来している。そして、ヨーロッパ中どこでも同じだが、この国においてかって労働者が生存していた奴隷状態に由来している、ということである。(5)」結局、ホジスキンはこの問題についてはどこでもこれ以上のことを言っていない。

しかし、ホジスキンはこのような考え方の上にではあるが『労働弁護論』と『人民の経済学』では、現実の資本主義社会における資本と労働の関係に焦点をあわせたことによって、さらに資本の本質把握に向かって接近しているのである。

注(1) Hodgskin, Labour Defended. p. 70. 安藤訳三七〇頁。鈴木訳五六頁。

(2) Hodgskin, ibid., p. 70. 安藤訳三七〇頁。鈴木訳五六頁。

(3) 鎌田武治、前掲書一三〇頁参照。

なお、マルクスはホジスキンの次の文章について「ここにおいて、ついに資本の性質が正しく把えられている。」(Marx, Theorien über der Mehrwert. Teil 3. S. 295. (S. 356). [354].)と述べている。その文章というのは次のものである。

「固定資本はその効用を以前のではなくて現在の労働からひき出す。そして、それが貯えられていたからその所有者に利潤をもたらすのではなくて、それが労働に対する支配を獲得する手段(a means of obtaining a command over labour)であるからその所有者に利潤をもたらすのである。」(Hodgskin, op. cit., p. 55. 安藤訳三六二頁。鈴木訳四四頁。)

ここでマルクスが述べていることは、決してホジスキンが資本を生産関係として把えているということではない。そうではなくて、その結果としての疎外現象を認識しているという意味でこの一節を積極的に評価しているわけである。

(4) Hodgskin, ibid., p. 71. 安藤訳三七一頁。鈴木訳五七頁。

(5) Hodgskin, ibid., pp. 70-71. 安藤訳三七〇頁。鈴木訳五六―五七頁。

（以下つづく）



# 書評

E・J・ホッブスボーム著
安川悦子・水田洋訳
『市民革命と産業革命
――二重革命の時代――』

飯田鼎

この書物は、イギリス労働運動史やひろく労働問題の研究で、わが国でも有名なホッブスボームの「革命の時代――一七八九年から一八四八年までのヨーロッパ」(The Age of Revolution: Europe 1789-1848, by E. J. Hobsbawm)の邦訳である。訳書では、その内容をとって、市民革命と産業革命の二重の革命の時期としているのは面白い。一七八九年のフランス大革命から一八四八年のフランス二月革命までの六〇年間に、ヨーロッパの人民の生活がいかに営まれたか、そしてそれはまたどのような矛盾や困窮やあるいはまた栄光によって織りなされていたか、そしてこの半世紀に余る時期は、世界史上どのような意義を担うものであるか、総じて「ブルジョアジーの時代」と呼ばれるこの時期を、きわめて該博な知識と軽妙な筆致をもって描いており、いわば現代世界史の入門書的性格をもっているといえるであろう。といっても問題が多方面にわたっており、原文が、こっていいるせいもあって、訳文は必ずしも読み易いとはいえず、五〇〇頁を超える本書を読了することは、大きな忍耐を要求されるといっていいだろう。

著者は、その「まえがき」でつぎのようにいっている。「本書の目的は、詳細な記述ではなくて、解釈なのであり、フランス人が高級通俗化とよぶものである。本書の理想的な読者というのは、つぎのような理論的構成物である。すなわち、過去について好奇心をもっているだけでなく、世界がどのようにして、またなぜ今日のようなものになったのか、それがどこへむかいつつあるのかを理解したいとおもっている、知性と教育のある市民である。したがって、もっと学識ある読者層のためには、当然もっていなければならないような重い学問的装備を、本文につめこむことは、衒学的であるし、要求されもしないであろう」。ここに本書の目的は、はっきりと規定されているのであるが、ただ、本書の特徴は、一七八九年から一八四八年までの時期について、さまざまな革命や動乱の基礎的な、社会経済的な基抵を描くにとどまらず、いわばその上部構造ともいうべき文化的・精神的側面をも決して見逃していないことである。すなわち、それらの革命が生み出した、あるいは革命の過程において生み出されたイデオロギー――宗教、芸術や科学についても詳しい考察を行っており、著者の広汎な視野とともに、そのマルクス主義的な立場をよくあらわしているように思われる。

著者が読者に訴えることはきわめて多方面にわたっており、しかも問題のとり上げ方があまりにも実証的であるために、理論的に十分に整理されているとはいえない。そこで筆者は、本書をよんで得

られた感想ともいうべきものを、つぎのいくつかの問題に集約してみた。

(一)　この時期は、イギリスおよびフランスの市民革命および産業革命を主軸として展開されるのであるが、イギリスとフランスとの間のこの問題についての対照性と相互関連の問題＝階級と民族（ナショナリズム）の問題の提起

(二)　市民革命の遂行において決定的におくれたドイツ、オーストリアおよびロシアを中心とする東ヨーロッパ＝絶対主義的諸王国間の膨脹政策の相互矛盾、およびバルカン半島および中東地域の覚醒――ナショナリズムの勃興。

(三)　土地所有と階級の問題

(四)　哲学と宗教およびイデオロギー

第一および第二の問題は、本書のいわばライト・モティーフともいうべきものである。いかなる国においても、政治的な革命が産業上・技術上の革命に先行するのであるが、イギリスの市民革命に比べるならば、フランスの市民革命は、前者がいわば政治的な妥協に終ったのに反し、マルクスもいうように、決着まで闘われたことであり、その結果として来るところの産業革命においても、両者はきわ立ったコントラストをみせている。すなわち、イギリスにおいては土地貴族とブルジョア階級との対立を秘めながらの抱合妥協によって、充分な資本の蓄積がなしとげられ、本書にものべられているように（四八頁以下参照）、農業における資本主義的大経営の展開の結果としての農民層の分解、農民の土地からの分離が決定的に進み、一八三二年の選挙法改正に至って、イギリス・ブルジョアジーの支配は確固たるものとなった。これに反して、フランスでは、絶対主義とブルジョアジーとの闘い（といっても、この革命には、パリの下層市民階級ともいうべきサンキュロットが非常に多く参加したのであったが）、すなわち旧体制の統治機構および既得権益と、新興社会勢力とのあいだの衝突が、ほかのどこよりもはげしかった（八六頁）ために、この市民革命は、たんにフランス一国の内部にとどまるところなく、ほとんど欧州全体にひろがり、封建的・絶対主義諸国、ドイツ、オーストリア、スペイン、ロシア、イタリアなどに深刻な影響を与え、さらに、それを通じて、世界各地の解放運動に深甚な影響を及ぼしたのである。この意味で、ホップスボームが、つぎのようにのべているのは教訓的である。「当時のあらゆる革命のうちでフランス革命だけが普遍的であった。その軍隊は、世界を革命化するために出発した。その諸思想は、じっさいに世界を革命化した。アメリカ革命は、アメリカ史のうえでは決定的な事件としてのこったが、それは、（そのなかに、またそれによって、直接まきこまれた国々をのぞいて）ほかのところには大きなこん跡をほとんどのこさなかった。フランス革命は、あらゆる国々にとって一つの画期的な事件である。一八〇八年以後の、ラテン・アメリカの解放へとみちびいた諸反乱をひきおこしたのは、アメリカ革命の反響よりもむしろ、フランス革命の反映であった。その直接の影響は、ベンガルにまでもゆきわたり、そこではラム・モウハン・ロイがそれにはげまされて、最初のヒンズー教徒改革運動をうちたて、近代インド・ナショナリズムの祖となった。（かれが一八三〇年にイングランドを訪問したとき、かれは、フランス革命の諸原理にたいするかれの熱意を示すために、フランスの船で旅行にでることを主張した）さいきん、うまくいわれたように、それは、『マホメット教の世界に、なにか真実の影響をあたえたところの、』しかもほぼ直接にそうしたところの『西洋キリスト教世界における最初の大思想運動』であった。十九世紀中ごろには、これまではただ人間の出生または居住の場所をあらわしていたトルコ語の『ヴァタン』が、フランス革命の影響によって『祖国』にいたものにかわりはじめた。『自由』という用語は、一八〇〇年まではなによりもまず、『奴隷であること』の反対をあらわす法律用語であったのに、あたらしい政治的内容を獲得しはじめた。フランス革命の間接的な影響は普遍的である。というのは、それがその後のあらゆる革命運動にモデルを提供したからであって、（好みにしたがって解釈される）その教訓は、近代の社会主義や共産主義のなかに組みこまれているのである（八五頁）。

著者は、フランス革命の世界史的意義を正しく理解して、自由および平等という啓蒙思想の顕現とともに「祖国」の概念の形成をここに見出している。いわゆるナショナリズムの起源であるが、しかし、この「ナショナル」という場合、著者は明確には指摘してはいないが、この時点においては二つの意味があることである。ひとつは、ポーランドやイタリアにみられるように、他民族の圧制と桎梏のもとにあったところの民族の解放という側面、すなわち民族主義という意味におけるナショナリズムであり、いまひとつは、ドイツに象徴的に見出されるように、国内の政治的不統一＝封建的細分状態の克服と国民的経済圏の創出という統一近代国家建設の要請という側面であり、フランス大革命の全過程はまさにこの二つの側面をあわせもっていたところに特徴があったのではなかろうか。しかし、フランス革命について、著者は、つぎのような重要な問題視点に欠けていると筆者は考える。それは、フランス革命の特殊性とそれによって規定されるフランスにおける階級闘争の性格である。一七八九年、一八三〇年、一八四八年と重畳として起伏するブルジョア革命が示すように、決定的に闘い抜かれたにもかかわらず、一八四八年以後もなお問題が残り、いわゆるボナパルティズムとなって強くフランス社会を彩る封建的残滓が、政治と経済のあり方を規定する。この根本原因は、著者も指摘するように、一七八九年の革命そのもののなかにある小所有者・小農民の利害関心と思想である（九八頁）が、このボナパルティズムが、なぜ一八五〇年以後、あらわれるか、いいかえるならば、小農民が、イギリスにみるように政治的にも経済的にも力を失わなかった理由はどこにあるのか、フランスの階級構造、階級闘争および資本主義の性格にもかかわることであるが、闘い抜かれた四八年革命までの過程のなかに原因が見出されるべきではないだろうか。筆者の読みが浅いのか、この点について、充分説得力のある説明がなされていないと思う。

第一および第二の問題に関連することであるが、一七八九年～一八四八年までの市民革命と産業革命の重畳たる二重革命は、「第一

に土地の商品化、貴族の諸領地につきまとう限嗣相続その他の売却または分散の禁止の打破、第二に、教会領所有地と広大な町村共同体の集団所有地――したがって利用率のわるい土地――つまり共有耕地や、共有牧草地や、共有林地などが、個人企業の手にはいりやすくされなければならなかったこと、第三に、ブルジョアになりそこねた人たちからなる「自由な」労働力の創出という目的の達成」を目的としておこなわれたものであることはいうまでもない（二四〇頁）。けれども問題はまさしくつぎの点にあるのではなかろうか。つまり、二重革命は、以上の三つを中心として展開されるのであるが、しかしそれにもかかわらず、イギリスにおいては資本主義的大農制度を確立し、フランスにおいては圧倒的な小農民経営を固定化し、そしてドイツにおいてはユンカー的大農経営という特殊ドイツ的経営形態を必然化した要因は何であったか、これこそが実に、それらの国々における資本＝賃労働関係を規定し、それぞれの階級闘争の性格にも大きな影響を与えたところのものであり、この基柢的要因は、一七八九年から一八四八年の二重革命の時期に見出されなければならない。しかし、読者は、本書からそれにかんする理論的説明をうることはできないであろう。

最後に、この二重革命における上部構造の問題であるが、これはまことに著者の趣味豊かな人柄を偲ばしめる諸章であるが、筆者には、これについて批判や感想をのべる資格はない。ただひとつ、宗教と経済の問題に関連して、著者は、プロテスタントについてふれているが、わたくしは、やはり、この問題については、マックス・ウェーバーの「プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神」（Die protestantische Ethik und der》Geist《des Kapitalismus）を想いうかべる。周知のように、ウェーバーは、「資本主義」の精神という場合 Geist des Kapitalismus と Kapitalistischer Geist の二様に使っているが、前者と後者とは、明らかに区別している。思うに、この二重革命の時代は、前者よりは後者の意味、すなわち資本家的精神こそが問題となっていたのであろうが、著者から、この問題についてきくことができなかったことは残念であった。

あまりにも博学で、問題があまりにも多方面にわたりすぎているために、本書の概要をつかむのが精一杯で、積極的な批判といえない、たんなる感想を書き記すにとどまったが、本書は多くの写真をはさんですぐれた啓蒙書であるとともに、この問題の研究者にとっても充分読むに値する文献であるといえよう。厖大な原書で読むのに難渋した経験を筆者ももっているが、安川悦子、水田洋両氏の訳業によって、今回、楽しく読むことができたことは感謝に耐えない。なお、最後の「訳者あとがき」は、著者ホッブスボームの人となりを知るのに大変便利である。多くの学生諸君にお奨めする。

（岩波書店・一九五八年二月刊・A5・五一七頁十一九頁・一、六〇〇円）。

---

書　評

## 新野幸次郎著『現代市場構造の理論』

原　豊

伝統的な価格理論や企業行動理論のもつ静態的性格や限定された市場構造ならびに行動仮説のもつ限界が反省されて以来、今日までかなりの年月が経過した。そして、この間に、伝統的な理論が捨象してきたさまざまな競争条件や、企業行動と市場構造との多様な相互制約関係と市場成果に関する数々の理論的・実証的研究があらわれている。だが、「何ら包括的な原理をもたず、ただ特定企業の特殊条件をあらわす個別的ケースの蒐集にすぎない」（ハイマン）と批判される側面や、伝統的な理論の静態的な性格が払拭されていないという難点が、この新しい理論的発展の方向に付随し、その成果は必ずしも満足すべきものとはいえなかった。

本書は、このような伝統的な理論およびその後の理論的発展の成果を基礎としつつ、市場構造に焦点を合わせ、その動態化すなわち、現代市場構造の形成と変化の論理を解明しようとしたものである。本書のはしがきにも強調されているように、市場構造のいかんによって、市場成果、さらには国民経済的成果たとえば経済成長には顕著な相違がもたらされる。したがって市場構造の変化をどのように把握するかは、資本主義経済発展の論理を展開するうえにきわめて重要な意味をもっている。

ところが、今日まで、このような市場構造そのものの形成や変化が直接の分析対象となることは、産業組織論の一部を除いてはほとんど少なかったといってよいし、分析対象となっても経済学的解明が十分になされているとはいえない現状にある。本書執筆の動機は、市場構造理論のこの現状を少しでも前進させる契機となることにあると述べられているが、豊富な学識を駆使して市場構造理論のパースペクティヴな把握を可能とし、数多くの問題点を提起している本書は、十分にその役割を果すものといってよい。このような本書をかぎられた紙数で紹介することは困難だが、以下その要点だけをとりあげよう。

まず、第一章は、現代市場構造の変化に関するバーリー、ミーンズの問題提起、アメリカにおける経済力集中の実証的分析と、それにつづくTNECによる産業集中の調査をとりあげて、現代市場構造理論の発展の契機となった現実的背景を明らかにする。「その原因が何であれ、現代において競争制限的な市場構造がかなり一般化し、かつての経済学が出発点とした完全競争や純粋競争といった市場構造とは全く異質的のものとなってきたことだけは、もはや否定できない事実であることを認めておかなければならない」。

このような市場構造の変化を古典的な経済学からはどのように説明しているか、その貢献と問題点は何かを扱かうのが、第二章「市場構造の変化への古典的接近」である。とりあげられているのは、マルクス、ヒルファディング、スウィジーのマルクス派と、マーシ